周慶

伊地知文庫
文庫20
101

清為親私了ん様ん為ニ不い為
花見月私ニ了ん様ん為ニ不しい為

本井
清井様

文庫20
101

園塵

春連歌

伊地知氏書冊

かすミハ霞そのうちにさそひ
あさ霞れなるや家たちいそくらし
うつろひの花色なるハ老ならぬ
をち行のひと霞あさまたいふかきそ
伊勢のうみのはるかさかん
なるかすミ神風の山ゆかるゝのうらく
宿りやそらし志賀の浦
松志賀のまはらかさし霞のきと

[seal]

いつの御世やまかつらかん
まれかとも千里の海の無津浪
まつのはかまも七ゝかゆきとなる
秋かぜのぬれぬかすみのうらて夜
春をそふけりかへしあまよみの海
みちのくとくらくもさあさき雲あ
ころも待ちし志賀の花のきつして
山の端と秋さきりすみ海に帆
のこ波さく花小嵐せき帆かけて
あかとまりはる来まつの志賀香

すまかく風のとせハ浮たまなく
よし野山雪のふる里まさは来らく
海すれは空ともあらはとまえ
雪けふる古る山風やましすけらく
浮く志かくもてさそふ来ゆるん
世のいかへるきたるかとさかれ落
は来た年の世花のてさき
長閑なるさむれるくのみにて
おりひとやまのまされ志る雪
のさらなさきの風のあきさの母

鶯もまては甲の山の風のあまり
めくるより京や世間にあふめへん
さかりもて茶うけすむしろ
松ふかしも一本の風はたえて
あといふしのへやのおもりきを
宇治川やけのかほりきそて
みをしく茶香は匂ひすれとらし
うちひとの宿のうき雪れ山里にあ
雪に日のそく朝あかつのそら
家より香のかをり銘香ありあて

梅あかりひらめ堂ほかりそう
うちひとの雲より月のあきらて
花のり移かきを階いるの右
誉のあるきれ名香をせて
のすりを心に床弁あるも年せて
義むかうあてすくるもえ心
ゆ来のへのとやてあらん
道の自風多くは寄の梅の花
山ほとまてもこゝの茶香あきらり
くまあの集にまつれにも梅されて

しらぬ木とも成てき〻の花さうて
来かの梅なり志ば〳〵やま
花のみぞ人てお(と)のまゝら
まゝの春のまゝ風もそち草
かゝるの松の香に〳〵来て初て
みの草山なりきさめ井の小河
雪も庭なりかすみ川風
吉野も志津の小米桜ともめうそ
人もとや〳〵庭そりすゝめ
吉野より〳〵海の中吉の雨あうて

君は〳〵の松の木の中や
雨のすも若紀みどりの鳥の声て
くらの〳〵かゝるそうて墨のかく
きて流すく萩の風をうて雨声て
桜の都の志ら〳〵門の吉野
鶯の井の柳のゆか〳〵の風に
糸よりもよそてとゝ紅〳〵
柳なりおはの吉の〳〵めき流雨
杉まと来て梅さく前のゝまうて
門とて〳〵とおの風ゝ〳〵

のわきにくもる宇治はやまへしも
清見かた月のかけとのゆふ霧
さくらかりにハ桜のとかけ須磨
かゝる夜の七夕月夜ふらかけを
長閑なりすけるやとの池くの
かゝはやく角田の月の新かさく
待くらしきよと秋のあふりん
月かけとりかゝみ川そ清からむ
かすみの山路のあさかおち定
二のち星のくつるの藤の中遊めん

春なりとく河あくをとしもかへ
尾上のくれ秋も山にかゝるや
みつの手水ことに青と錦さん
かつらの里物はなれ花は天津尾
内のくともなつかしくまま
山崎の尾上のさくら待はやの
吊はは遠路いくたと遥もち
きのぬるのをかへよし野の花
よ淀川しも宿は嵐こそ山の桜
はやき草はる尾上花き乃て

わかしと花をはるかにみれは
藤かつる野ありまつる吉野の桜あり
やまふきかりかや花ちりつゝまり
かゝせ世源氏の春をのせ山さくら
おりひつもとまりくとも見し
志津のみちてたかせ花のところつ道
岩はあつて吉野かへりせあさ道
はるもそらはるゝの霞せる桜も
さくらのよの長閑なる春
花のちりさきめのけしきはわつらく

はなさき尾吉山の奥の弥とつ上
おもは春もかせも花の野風野辺にさそて
からおちく源氏とて世にある
高砂のおのすみの奥や花のさん
吉野おりひき吉野をと世のわれ
くの里花の山の瑞月にて
かすか吉野の春のとて打も
ゆ春く心嵐の山のみね桜花
又吉野の國ゆまよふ萩に
花りしをさかいの山より野を山

あら〳〵とたえくかきもめつる山
あるまてハ花すさへ東風にきえて
野辺の草いくれもすへてにくらし
はるゝ一本なりと四方にゝほふさ
世にしれましの梅にゝもてする
花にのこすとす末の世にはなりけん
りつのきの志らせの宮に給
多く〳〵の花にむ草もも
非はに火もしいその山にこそ
海辺〳〵のうるはし花のうつりかて

の秘すのはなりいさ〳〵ともし
山はやの花さへゆふ色に見えて
中に色の殊ゆき折りしは山
はる花の多やいつはらの宿そん
よう青ゆうきのつまさくそゆ宮
かつきの花中中ちとおりそへて
明よりまさ東の空に共にあを
よわくやねも志はえのさく花
かくるもやそま甘のつくしさ
花のそよの色のはつゆめのゆめん

よしある代々のみ世ハおさまりの
くもとも花よりさきの未来迄
梅の世まてとちきりたなれ
何か花のそてにハ吉野花の様
木のはしも吉野の山ふら
ともえも桜木のさくらあるきたく
くやうらゆかし みこうちつかみてとり
桜花なおちさく霞吉野の紅し
あらみなからにはみやこのさ
河内まてある花のそころて こうめて

やまかくらり御ゆきくてといや
御法堂の花のさくらへちらりあらし
こりりゐぬのなきとりさなきさ
松世に花ハいらぬ風ちくすりと桃と
月のる柳のいと心のまゝ春を庭
春のあとおさめ寺にそ花盛て
深山の御まへ吉野のあかりき
有明里の庭の花あかり出て嵐まて
日ノ新春ちくりの十しき木ありと
吉野さくもまつあさ野の花のまゝや

又ハにくきむしとりの巣ともなし
花有中あるの嵐よけのあめ
いり世よりそち来ましうきとも
花の香かする香風をとをひく
へのうかむしやとりの
とさくやか風にて花ハ常盤山
ものとも来てつれしれ山
河するへハ花の志て中来
雅戸ゆ中守て雷をいらつの
草もて中ま中ま来ても花ぞ花

仍ての月ハと来ゑてある雲の
地の月花の月あるあさらふ
又たそて好もるゑとそ露来
青葉ぬもそゝやはむるかもせ花
苔の鳥井のや松のむら
青葉の花ゆるをその軒みて
春も秋とのやうゆとすさ
花茂の下葉ゐの月をの来く
言ともく香つる花志て雪
花ゐ作の来つきハ秋の中の色ぞ

今こそ花の盛りはやくとめらるゝか
風をいとひ宮にちりゆく山桜
かこはとすみのゆへとさへ春
花みて風ありいかにあはれ
いとやとのと風ゆらとつき
人すまぬ花の衣くもやゐらく
めぐりすみゆかりめぐるま左
何る花にかくれし新くま善て
そうつとゆとのなきとうりれ
人とさは病にに花ちりすゞくさく

志やうのまに雨の露それはしまゐ
うく記南ともならぬや花みな病ん
清くうりにゆらむまくさ
給ふ気花の世にうきわりまさて
月とほまとこ河りて北ゆ守
か色そともみて雨ふすみらく
ことつ善のさくら日ともすた
暮華わりつゝま世とうりなて
かさしつきくてわりせみゑこう
ゆらす春るあり此山里門はしらく

舟はうみをわたるの本也ゆへに
浪海の歌なとは荒き事なく
字つゝきの風にもやはらかにやさしく
もとゆかぬやうにとあるへき事

羇旅歌

云旅とはいさや遠くのこゝろ
凡帳まてもあつまる旅にまよふ
まつ都のあはれをもとめとおもひて
卯花山なりあり明ゆく月
山ふ暮ゆきてとありこゝろやさし

風をひきてまうけ由まつる都と
さてといふ也より此月曲の元
伊かやうにもかゝるやすく物ほとこ法
はりとてハ奥風さりゆき
うらと字てすぬ云風にの都へ
きらそこ旅とはく音川舟
月ふくらもやまりの日に来音
舟てきらぬの道ハ浮き世音
都たいくとの草木かけ河らん
やそぬ年ことし川のうかすれ

山田や春深底ますり那
卯月の雨ふるらのふりあめ
夏茂草も盛めのみとりなまて
すゝしきまはおしきしまする
と山田の早苗の末葉風うて
いつかはその夏の夜代夕ク帰
秋のうへ軒の庭の鏡の風
むらさき代薪鳴きてなよきり
月影にあまるも露やらや草
きらめきていま待くらし津ゝ

五月雨にみゝや月影日の立けり
野への草葉茂りのうちあふれて
澤のほとりさくてまつ代
ちる川おもてりに石のほとりて
秋しく流れゆく花の色代
入道こす影り母そらくろ
五月雨の雨か河柳のほとりにて
蓮葉にのりまる露の玉もとよ
夕立きりかくうたかふる
岸の青色うつりくるかな

竹のこやさしけつらくもとさめつゝん
すみかは人のいはの道せんへ
かせのさく草のともしひもしめ庭
よそし来多いさゝめあつき秋
蚊きとく外面よ志けの色居て
こゝのゆけく風を竹の葉
軒ちかき蛙の声くゝりは聲く
深くの草そりきとゆくかすゐ
元をりつゝ庭とり人あそともかつ
人も志のふ年を軒ありてくゝらへく

袖ちか来雨とゝかほとゝのつゝのそで
こきみゆくそやとりおもけのか
萩草のかきにゆゑ志てもよ花をしく
をさ来たる松や冬来とゆめん
志くれの月を夏の志い秋来
いくせ竹の志くれゆくやゝ
夏きて月みつそ露のかのみて
夕のかはみりていくのせゆるぬるん
うつりきや来るみの月のかけ[illegible]
えひとはまして水るほひの歌

夕さらとしよれる雲に稲妻して
猿のさけはしてもころや音せん
ましあてうつ夏の庭さしひら
夜とや流るまりの撫子かせ
夏は白木の秋露にも撫子して
あゆぬ衣とく衣くるとうし
あ浅茅日の房ぬ秋もあきしふも
〳〵そらきせぬゆりかさ音すり
ぬれぞゆくさし山ふみ流しをさとて
きてろつくやまくり夜の月

おりくさ夏野の萩の花くみて

秋連哥

うつろ来ぬとそこよりもし秋
夕露の女郎花に風こよ秋さりて
面うつく野らをゆく〳〵しし
露あるとこ〳〵のと津の小萩原
夏もこれは波の秋ぬらふ通
来く
〳〵みつ萩うつしく時
何ゆく月そろみてうつゝん
帰るさ草木の露のゆふ暮

朝からき雨に待やかに風もなし
露とはかぬ浜はうかせらいに
うつしみあぬぬ杉山せん
道守りて露かす小田の山蔭
鶯いうらん霧せらとくる野
あき露よふきえて多くれ花そさき
こほれはへときへ秋のいはらり
素すみぬ尾花よ伸ふそのさ
いやしくする秋の中つき
風まきの尾花と香のをかりみく

草むらこその露北まさくる来
多かく浜野つかゝ二葉の杉みらゝ遊
多かりゆく野ゝのあき風
花のさく千葉のすゑの杉にくう
うきとはそれあきのやるさゝ
あの浜来の川風ゝく露ふりて
うら浜とあつくもとの居るう孫
鷺のせふそのあき霧まくれて
野ふのおやの野への山霞たか
あきかりきとうもゝ霧まそりけれて

あくまでそり、秋萩山みち
夕霧たり駒ちらし渡一ツし
高ゆくのあり月のさやかなり
川霧のけしきのあまと嬉すりて
越より花をぬしへゆかん月
所の山やう鴨風に来りまそて
とくまはきぬ川原の里なく
来る露りとあるのこ萩花のく
風とはらてみかまゝみすやうかん
けふあきはなりまうなりる○

吉山のて芳秋のさかした
天津乃お葉濃舟の清すを引て
水をてはまうく葦の澤のへ
そり野の稲をおもろく草のまゝ
のうか○のはの秋のかりへ
葦の野のへとうの里なと参て
風のとやらのすき曲しき山
さとうの里の篠原をよれきて
野原の生来り月てさぬく
山もやみとき霧のくまさ原を来て

都いかにて春 秋の中なる風
まく笛と知しやはき雪かん
あふせまでそよぐ草の庵とり
あつ浜来と浪守ぬ庭の影させて
秋風の舟らのまゆや山すらん
初もみぢのさとしうせ井あり
あさきあしたの露の草むら
松山よすの都とまうらく
月おのなるつくしの庵
まつ山の郷と山居風来て

伴ならのうらに宮古ふくや
老来旅にかえて由松陰の龍尓逢て
かくせるあつきと浪来山かげ端
秋の日のおはるや月ぞあそらん
霧ありくきそく松の木さて
みつ山や此くは来くて浪月おて
ゆめのいはつりつるしとりし
わきてもや海にいつも出月
こかこやそ庭ふ舟しさかえて
まくひとうかくとなんのはし月

泉水や秋ともしらぬやしきまん
志ばしの杉なる木のまりの月
とうすゝきまつからも夕ま暮
しきめかつ庭やきのくまる月
いさゝり声の志きそれうつき
清颸や月の川限いくせすゝく
いくとむ苔の志きしかつらん
此中空くいくしとく同月の新
ねこまふいよりまく桜の葉をとつて
すゝきのなか月夜さきや 宗秀

秋風と志てのみ庵のありさかて
出て人々あまや中ふくしきなる月
草いくとめのせりかり松ゆれ声
月見は房来志わしれ庵のふるう疵なか
人そうりきをせ出ふかうみやのら
只うくとあうま志とみなか月かさて
山ふくのそやゝりまとたちめらん
そてかにさらあふ川来なる月
やとりとさき瀬はせれこの毎く
露もまた季秋の月影うらてさむ

うす霧にハ風とゝもにて
月にくまなき秋のあはれきとめまつらん
と考ける物なれは旅人の身の
きやうする月の光に秋すらく
身の上をとてもみハいさしおもひなゝ
書くに此月とさやかなりとも機
契りて露の庭とりなりきより
霜なりみなの雲と雨まりて旅人の月
あきの国のめかりなりけ
天地と月の光りハいもせかなて

あひみゆるの夜すがらまもゝりつくさゞる
ち庭なり歩ゆきて契りし秋の月
秋なりこ絵のゆそてまきやさん
いつ山と此ゆとつる清て此月
象もてよもとうつのあり川辺
いつ月ぞきやうすなとこそ月ぞみせて
つまるれとみつまるるやうらん
松乃葉ゆくゆあるありあまの此月
出のまゝ劉郎やうなる宿の川
月此ゆくりなくてあり河宴の歌

月の好宮(?)ふかきまくらとて見る
あきはけりや秋さし山ちやと
めさそや露の〳〵つゆのしん
秋らし山帯露帯やと〳〵中ちくさき
き乱や ともの山田とゆ都
峰さし山さき里のさゝの月らく
日もくきふ井のうとま宮の女
秋のみのちを影の末あふくと乞
霧の山の里中く松のうら浦
秋の山のはの山の峰のうの中

露と露中のせしあおよるて
枕とりあとるゝ秋の風ふて
とかのみとあくきとれきく
秋風ありならく末もさもの秋そ
あらのうの中のさ末はれをそ
あくれ秋いへあの流帯よ雨とちて
まあの降ききの花葉しる秋
長秋秋と共のさまきる秋をて
難波の月はいあらとゝや
秋の秋と花とらとゆうち海ちと舟

月をみてさへなかなかはとふの池
秋の風に浪よせ萩にさそはれて
露霜こそぬれしをかなしきも
かる雲の中ゆくあさらの名残なく
浦すまれ渡りみなくや月かげき
としのもとほれ秋の夢かくれ
きみおもふなりと風にぬ秋は雲
こころふりいつらぬとなる志菊
ことおりわたの秋のくれ風
あはれなるそいざよひのはるかなしきぬ

渡りゆく月の中の新
露しらず門田の稲葉風さらく
風そそく秋の風かなしと
うら見ていつるいとひしき早苗は
鹿の声すまし山のしはかき
かりのこゑまさ田やかねと見のもち
わかれまで声なくの母とありて
はかりみくともあはれの田かりかね
とりのしほやあきらかのん
引きそめ草は鹿の露ぬらし

野への[illegible]なかれの露しも
錦と作る庭の秋草うつれて
まつかる野とハ秋風北ゆく
白妙の[illegible]みの中山冬にさて
すゑ[illegible]ま山ゆきて秋[illegible]く
あ来とくの[illegible]の紅葉[illegible]く
若[illegible]松ら[illegible]秋代山風に
紅葉しの[illegible]中[illegible]て
いそゆく舟を風のめ[illegible]
こ[illegible]の木代幾代[illegible]は秋[illegible]て

山風あら[illegible]河[illegible]せき[illegible]と
世[illegible]ハ[illegible]治の[illegible]秋[illegible]て
さ[illegible]の[illegible]屋に[illegible]やさそて
志く[illegible]松[illegible]露ハ[illegible]

冬連歌

志く[illegible]の[illegible]とそ[illegible]あ来風
多くの作り[illegible]冬の[illegible]きて
来そて[illegible]く[illegible]ハ庭に
山[illegible]よ[illegible]ゆく[illegible]
ゆくや雁たる山寺[illegible]

風さ世み志らて本堂のきはしらく
霧降の月とるせつみかくしへ
本尊事山ともまうしまじき遊女のあ
こゝ後伏見の露のめぐみ風
わかしと本所にて渡山河水ゐ
人とこぬ米所多まらて惺く
きさ山は水なり本かうて鳴く
あかゝ吉冬のひかり多く川音
りかりみの影冬のれいとさんて
しはとむすてきりくのつさし

冬はまためきりれぬきのめきらう
雪ふらんもくらとし山もや
ねてやう吹よるのの
そうよる首奇れわ
ふしまほりの蘆のうち露風はて
ありかの御のあらんのつそ
玉藻のまためきる露の花やうこそ
底のゝ〇さしかゝ出りの澤の
風さのほとこみの柳みそれて
小松の流くからふ野は花東

冬の道のやそぢ山かゝり
さかりぬる花もちりてゆきかり
冬かれのをばなに霜ふりかゝ
萩のはしけゆふくれの
玉くしけ二見の月も浦はれて
二たひあひみし妹か姿
冬はまた岩のあの月のかけん
あきのころ霜ののに橋わたりて
まつも雁ゆく冬の木枯りや
宮こへとりまかみあらと見られ

冬のよの日の長閑なりあらく
霜かれかゝるゆかぬ中のゆくを
時雨の雪のの方の庵のあと
野山ともみるぞ荒れたる
雪はけさ大に降てぬかりそめて
みまへこそ久の色ありせきと
おとり川潤ぬるる雪も風出て
あくしをとあるかぬくやさ
守さみの風さわり待つの雪
空ふりくかゝりとちらふ夕かる里

山もとのあまよ山より雪きえて
山きえぬとは世しの霞みて春
雪のした草の木くのしから
句にこみ冬より春へ也
見えぬ世にはとあれど雪根に雪ありて
まだ二月はめづらしく有あり
それらいはゆの山雪の句にて
とありかたきに句とも申すそれ山
雪の下草さみ去ぬあさ雪つゝ嶽
かく人のうつみするてわらすり

きのふの雪は山のくもりきえて
道ある中にまた道ありけし
あさくれし雪やけさよりのめらん
去年よりまで春はつきぬて
杉の薪なりはりの志て　雪
春なり梅の花やさくらん
薪しも雪はきえといふあさもち
山めでもるとよ北まほ新めり
雪は日からにれまでとやりつ○て
山里やむらの雪まで世かへん

あきてはゆかんと来冬こそはし人
兄のはなちりて来ハ冬こもり
すみなくおもふ寸るんも松こは舌
雪のはらふる宮ハ月卯の花
山はとりのなにあまもの冬こもり
しるしのいとしやすみりん
人るまかりく島ゆめるくあり
鹿のおとはらさるりゆきま
むとりするあふらせとのゆふする
春暮のうちに暮中風そて

千とせるくらの代のてや月さて
いろゆるのさゆ志りやむくらん
のゐるのゆらいのはゆ井て
まろ年の鶴と志てハ江りて
まつ冬のらや冬やく白ハ
まち花ありとらく冬のはの録
いろ花すりのむらのうちゆ年暮て

寒連歌

野ハ冬のこのは神のみ霜寒さ
夏草のくはゆみゆとありけそ

おりつゝ流く来恋しなかりきかな
志のゝ音ハ月の影うつるとひとくなや
こゝ阿のむくいと流ゝ志てもん
おりひあまりおりゝくへにひのねく
ゝ風の来にてあくそゝつるれ
志ぬふかぶ君とおきくてめつて
かゝ君おりひらやきしまするき
世ふあいつ扶流くとさころりめて
えらと海くらやもとうく音ん
よそめうれ月も袖のさけりさし

志らへゝかあられ夜の月
高砂のまつ袖のゝ秋風流れ
津まるすさの来のうぬ夜もおやもん
いゝ森なり都ふ分まつりとつあらや
玉章ゆ今いつてつ来やうく
さいより比のこゝろみ来かくせ
みのゝまうれしきそうせつえ
松山まいつかとや志て海ゝん
あゝめこゝや ときりゆへ
うゝまつ風さし来夜しらしと明らく

〽さはこつはなしをやつくや
物おもふ身には門に出てたゝずみし
まちみぬ夜しもさへくるしくみゆる
さは〳〵のきこりもしらずつまて
またうし山寺の中にしもとあし
やうくわぬるを住あそきつらうとこそ
いのちとて いつの世もわかれ
定まらぬとさすりめぐるやとふ
あれは浮世をよしとするまゝの代
ふりすてゝふる里の世を新たる

みぬ〳〵とおもふをまつゆうしまれ
あふ夜ありしこ事積やゆかしか
なかどおもひてはたらく来
縄と思ふ事はやまぶきのすくる
宇治の里のみの島のたちもあり
よねさへきる別と今宵月のみぞ
涙のなみだ代いゆかすりん
山のおのやま志ら夜への衣かり
ちぎりとも命とて浮いて
まこと哀ぬるつゆて

まつせし／＼そやそてし山し春
いかにあらんとつゆは夜のあけ月よ
こゝろとしも春の明の月
まつれるかの〔[?]〕ものとゆかりとらう
ちるまではみやこのあはれを花
とりもかへとて寄りと名残花
まちまちてうつりのまゝ花の一筆
かりそめ[?]もまつ春をま[?]絶えて
色そて恵てものはとのかな
まりまつるかなゆとうまりて

今し此の月とみる山の[?]
ひとの力の春のまてやまりらん
色もみゆつの相かんかとらし
さ海へとりけりの君とうつらくん
夜明の月とうそまて世のみ
く浮秋とちかましへありさらされ
伴浮の中の色のみとゝ春紙まん
まついのち流まるんへかすらいふる
ふ山のありとら海のへすく世
まりいまうきてみゆらうしよとひかこち

ふそいかの物おもひとやみし住
は造る寺中なるかほとりの都
かつらはいかぬころかりきゐ
あとやりかゝへみ中でつまをて
見めし〽の告さきし声
智り新ハ青めぬる物のすくさまで
よはのつきゆ〽やきてゆん
〽さまさう忠のころさうゆら
桂かころさうりつめすの
露けり袖まきつてせともまでさせて

〽ゆきはてのころ香秋風
荻のはこみゆる物と袖の露
あきのならはみるともなき
志賀のみかたりとよりはころきて
まるいはてぬるとめてせめ
袖よりすみそのむかえとありて
道いうともてぬ香の日
こはのと〽かゝるひかりゆし
きゝつもりさゆうひまはすら
いかにも見るかりとてつきせや

新玉年ハうらゝとたちかへる
志つきりたみらしとやうにさらん
御代の春とさかえ祝ひの御酒まいる
うちのてらつかの御色もますまして
ありのあし
そうかゑりかたすら
上葉とともにさしよりがた花峯
こゝろの春をともあそびやうれしき
嘉の中みちにて書あつてきらし雅
流をもすみてすめしふ中に名
うたよみ月の声を春ありけるを

折り新たしきこゝろの庭の山吹く
かさみんつねの流れとまふの月
人もとかせも我とやあけは見
あひみ流の寿年とちはく月る称也
色まつり寿をせつ隆記くらん
ちよの祝ひとこいひしのえ花の
折り新たしきこゝろの童をつくる
ことんとつしふつ春の月くてるか物代
かりそめのえめしとまつの御をけそ
あつさきと小舟ちきりの世をう春

露とよみても誰ゆゑそめん
いはね根さす物そあり山草
こゝろ移りぬさま〳〵のすかたなる
生田川いく世ふる〳〵とうしん
浪よるこゝろのかきりの山吹
すゝりあふ思ふこゝろを人まちかねて
雲ありあらはたえ〳〵しくそは
あはせや〳〵のころもあきの風やま
いは松よりやまひもゆきけん
いつも山ありく野に色そへし〳〵きこえて

あらしにさそはれ人尾上やまかせん
石河の水のそこゆく末ちきりつゝ
みをさらへ人こひしきことの葉そ〳〵
誰こそ千年の末より後の世ゆかし
まつ中川よ神代きたりける
天津乙女のたもとなる袖ふりて
ひとり寝のさむさや末は涙そ
恋しきゆゑの秋世の中ゆつゆ
きえて見えぬ〳〵かくあらし
人を待つ月の末の庭の秋やまさそ

すみて世にありかたしよろつのこと
こゝろのうちも舌をはかりかぬるも
名をおしみてかなしきかへりきゝ音
かやりしまれにもかなしきとれて
さてとくみにまかせぬことあり
まゝ中にも心をはやくりく
世のうちまてなかりく世と也
也とへいける法の道にとも
うつゝとなりかくて道かくる仏法
へいそかなくれりかなしもし

鐘声くきていかなるしいはれけり
鳥の声きすみての夜もあけて帰らく
きゝてつゐに後とおもふ法の庭
うきよのうちに仏ならむ中
とても迷ひのとおもひて居きん
はの世のかゝる中やらしうくつや
うきとつらきも中ゝ世をあきま
たれかみと思ひつすてゝかへりきへ
迷ひのありつゝ世をあき
うきすゑのよはかなきりのこともなし

座しきをそて出給ひしひの道すがら
むさしのふさる中と姫とみるもとうし
とそめや〳〵の内ともすめらん
あさゆくみちよりあやうき右大将殿
忍のふよそかなしさそれあきらめ
あとらかこあつちやしくそて
恋路のおゆみとまうらせ給
とはゆうしあそいて御の殿にて御中
まてこうらく西とし出て参
しゆゆそく大いさきあへ御揚て

〳〵いみる花ちりいつゝろひて
さしすくる来ての夢まそこし
仍さめれるそころすりきら
忍ひてやまとめさ〳〵するめん
夜くありうる出なりすさ
春のいりとてましまの御方よ
そう代来まといおの来ての又
まよみの〳〵のもとまて
つきるさ〳〵ともちそれみめ
らきやれいの来もと御ゆや

あめのへぶるよとさのなかなよ
くらとらやうらみりうり
かくてとへのあつるとやもん
あさらうすうとそよそあうつきね
そのゆめよれとへいとものか
まつり連に流てぬと流へさみよ
とよくぬへとうきめうくや
ひる春いれとあつきとのよすりて
さすらゆりとまつ清の戸
松と流とへいさ世からそめさの連

はらく流てともちやせ春りせあ
うれと中井めくうふとふとなてき
ちまうあとやえんりそらくすうつ
恵ふ我ようくつゝときさ志てらく
いれのゆら色ゝへとあひみん
あくまてよいさしくの時とつらさ

雑連哥

と来れうつやくのぬ志ゆるん
花ならひ紅葉ちるの竜田川
からつひてあやくろしあぬ

中川ハときゝ舟かよふかゝるまや
うらくの志めよくうへんハはつもん
あつのそうてくやうのこ志ひうさ
日入まくゆふりあうて作りて舟
難波ハやあふくこやと言ひて
かくそふすゝみてくらしい者
あうへのみ者くは松の葉ハ落て
あくとまつさしゆうつうるつ
志保みちくハ汀の松とおもえて
うへりかとそめつ松のなとゆう

鎮江くとらの山りと塔みて
海ありいりゐの新形のとうさ
かくの立くる秀の家あの落きとうる
入ゆく山里のきられるるきさる
浜と人作りと尾上と松の緑
ますまや難波の夕釣うさ
すと唱くあへあり作り舟
こ縁保ま来て旅人の夕暮
浦と伊くとくの煙うらう乞さ
おりひわとうれあう〳〵みりきへ

らうかさ迄も志賀の浦を今ぞすぎて
まり〳〵は津ゝ月ハおぼろ
あかしき浦ちのこゝろよやすかり
かりかねふりよこぞ海士が舟さして
家島也けり津ゝみの浦の浪〳〵
いかりとみをよしつゝ舟
沖中の小浪もあさ出雲あかりて
こゝも世ゝりそのあとよりとまる
川舟漕ぐやせゞりろ水も里ありて
すみ田の浦のとし

あしの宿ハとおそ也つりさうりて
冬ぞ多くて魚津かまと去けれ一木川
春秋さし来おくいその山
夜あけのかくさりそうやもりん
かゝ又をとみてあやの池のみなれて
霜から花よ来藤その花さ
若あひのすみれよかぞ来橋わたりて
かたしひてうりのいりへのあと
いりの府つりもそ山とかりめん
夜しりてとしそ志きとうやきな流れ

めとさりし窓にむかへはつまてゝ
山のはの西にうつりて海をみわたし
山の空は人ともせ吾志賀のうみて
遠く見ゆる海のおもてやみなみの
ひかりさすよしきぬ山のともの里
あやうきかはしの松かね夕かせ
月影の有て嶋のみつかせて
おりたる鹿の声もかへりつゝ
笛れくたえす人の海つら
松原にも人の通ひておちたる

寺をおくたる山の志賀の空さ
松かゝにのひえて人の住
の秋をあはれの中に里のころ
海くきりかのをちて末の蘇
草のいろいろのしほれ吾
嵐は西にあと寺にありて
手向て雲一重にて名
竹すみし田中の小家枝かへて
人の山の秋なり猿のなく声
昔のこし出来れ嵐は落ても

かきなしみてすくみかろかりつ
岸せく浪のしかもはさみにあそ
よみてこゝに舟をとゞめつ川舟
風の音も浪の音もやはらかん
てすれから乗せこゑすゞしき
人ともなる水のおきこそ鷺かりて
江の浦をこそ雲となさきの春の山
志賀のひのとかり鷺の水をくられ
詠ともふて以て旅とも道すきや
うくひすいりせかりほと武蔵

あはれなり宿の泊の浪のさゝ
籠のうちの月われもいま道とおそ
石くさめ草もしらぬをりや
野のひかりやそとの駒とりて
舟のうへなりしこの世あはれまう
りおとの浪かやとりくさのあらん
あはれなりのこる蛍わらひとも
りおそそのつのめぐみ舟
秋の月のはなゆと舟はせて人
ことの色の花長き花と流るゝかへそ

海山をくゝる車とはくとめ渋
あさまとつりのはと海車道とうて
多とうし道のと洪水谷川
桃とましくころつて舟のかへて
伊川とこころのさまに淀ん
山かはへ稲きめのあと武者とうて
元をひくの君は来の道
永々なく書本の山ここへいて
世ありあくさする契すのうち
薪とる樵とる志ん草ふ庵

夕さ菩まさうの○ての一てし
戸へ乙しまくの色のやさしのと
さ寄のありかきあ二つらん来
小車の輪さらん葉墨ら雅
めくの元のの地とくとくのすめの
松とと寄よりのと車とと方すて
こ後とめはくをまし世中
かりよく紙もしりとく道天津へ
粮あまくてぬ上りのふうはり
世代らら山の人せるとの葉

いまの世の中を〱いひてきかつ
えらぬかはかうのかの舞とおもひ見て
梅の世さへしらぬ花をこそとゞ
返と人清のおもふかくやまとうた
勝ぬきていつまでの后とゞ人
しられいさせん〱のことかる葉
かことゝなりことなき葉集
の歌とつか筆の跡とところせく
かへりまとみるとても〳〵
めでし人の家定かいかのはてして

ふるき人のすがたの花ぞこきもて
庭のとくへりうたまとを道草
とくまとき天の羽衣
ある道の月とゝすむ東は文て
人のとくちのこころをよすがは
いまさかくおりしへ道農らるゝて
世にはころのと浄しとかまし
うたしようしらへそのめへとて
こ海の歌きこころかしきなる
とじ河の酔のさくらとかき覚て

花のいろかといひてぬいくもを
菊しらすゝ井て〳〵のは酒よ
袖よ露めの霜やかゝめし
とそく山〳〵のさらつ茂祥のさく
あらそくことは葉におかつらるし
馬のあし志ろ〳〵のしこれ
志らへ〳〵我市にめられ
竜めといい色き雲にまさすめて
小笠うへ霧さそいはにふ山かけ
木の落門とはなゝ石の〳〵つ岡

待えつる赤はきの山はかゝれん
宮うつの出来とちるきはなと
こゝろゑ似ゝかかとそすくさし
故郷のいさらかひ居我花の移て
萩の葉ふきゝにいちの秋の風
深山ゆりあさの露の中の跡と
せりゑあのすらへくさえ〳〵と
やまのやまれ高こと見てかへん
秋と見えつゝ君やえうれん
赤の空のせんさいて〳〵はれ

今ほと申の宿坊ハ〻無然ましし
すゝんて此ほとてめつらしやめつらし
山しとハ咲ともう舎きぬ秋風に
旅の垂さし海の中の家
車ハの家門我さらしなし
寺山宿もさむハ〻とをしとめ庭に
多くつくりてく門の舎のさ
九帝より似たる家ぬのあるしなる
うんとも御ぬすめかわくる山
多くあらすよまハ玄かよみ

一山の面とやしと音庭の主
くらさくと小篠と軒ぬかれて
いたりとおもふぬ神代に北をき
山里ハしらかくら橋けと
ほそくなりも風静ハおし
山水の軒のまむらて見さて
海ハ越さるく附ぬされぬら
め見たのおくの山ぬ龍岸て
おかしくや音来もろまりきり
あまりとてすまぬ庵の力き

とられの丈の由し我いそく
ぬかり門さ浪山きせかん庵
いりやふへ志津のあ伝来
山陰の河いふ庵さく部縁して
ふさけ人とおもふあ来の水
御言葉ゆくつきさ山雲の
松風つる来そ声の袖ら
ときと縁の里と庵とりそ
志めたの門をしうしてと苦
まかりと行れとぬ山の奥

か縁き黒とところきりをとり
来めつつ山雲すを世拝人
このまゝのくはそ伊りたん
すへし山のこ縁のさ来庵
う来世の風いはそけらん
山あるくすしてゆりあ
めし来ふしけの苦庵
来庵とおは家さくるら
山かりあまりてふ来庵
雨との志てもり苦川のの

時そう光てハ伊くさ紀楓見え
松のくゆうくきらん松楓見ゆ山乃奥
うてそよらハみくくう所ときさて
それ故あろ侭そ乃松風
出る人乃名残りのこさる山里か
月く世か山れ男乃すい風
すそくる八ゆの宮に秋すさん
人のうめもしと人つくれ家
ふうもそて人出暮とかやとし
人乃ゆきくとものむかくれ衣

いかる人の契りむすふ人世の人くに契
露とも世代まてく安穿む戸
二つとことりや志られまれ
苔ふみゆく人ふの男のしか
からまくらと志てゆうみち
面ゆくく男の志ゆくて神ぬきそ
まきとり野への人のあととそ冬き
ん宿しくそ契りて山宮のの山風み
志はくおつきく本かりともう
山の井れのぬ宮こと思われきて

かくりうなおとの山の端月いりぬ
み御こゝとまていはる松とりき
やうて嵐なきと北斗とゆう
今将く北ハ熱いそめつゝなまれ
女の身ハいなの紫刈れ我母り也て
ふか浪ありしと母のむなき出ち
かくりあらしとおもひハ北すさき
國とゆく振して神のまて
ハ色くつ寄女の情とつれ
道りやうのまゝ振まわりん

草筆の露なかきしるへの文
行秘の有り新とゆく野ハ書とく
神まはくろ女山の志く一字
やよりつ寿地中の門あさしへく
りへと庵てそろヘの振り道
と魚し山ヘりふを陽朝とふくさ
飛も陽寿寄松もそゝろきる
深山陽や岩と志りの東振なて
野と不すよりや鳥と称なん
山しとふまて空いくよ日てり

あかしき人今出るやうなれ
ともすれとみの山を過て山道ぬ
山ふかくそうつのやまし
馬すみと新あのこのと根の菅
めりつめかり道のくるきとさ
とふるとう所やまし来い根の元
わかうんやへりきくや
若のもしてうひる来物也まる
なりにくい舟つゝめさ生父て
ひしやみ魚ころともつかたん

仙郷と草の庵やあつきん
そちの山せかあ木の新風
ふしの庵のもれさはのかる郷
草枕中の色の露よ風らて
おしふとうすゝとうるゝる里や
茅のきてりえうか國は也
多せめ庵緒りるみて庵りく
かくそよあさきてうら草枕
何ともめりきりしひとときり
あるよめさえの来な庵と相○て

おもふとく何を老の山おろし
秋はこゝや武蔵野かや浅茅か秋
かぜふけ武蔵野の尾花の一むら
あくがる露と草のさかりの命かな
すゝき川原は秋ともしらつまし
あくがれ出ればいらかの山のかりの秋
うらむすし雁がねの雲ゐかりて
手すてなれてぬるよるぬれうらみわびん
紅もゆかしき思ひ道そむくの歳
かりそめの生死の命こそめの

伊勢の海人の月かげもさす秋扇
わかれはきを川竹の流れし振人
都卿人こそ昔なみにそら
めぐり逢ふ身の中は浮世の風とうきとききて
さてもあさの道とは涙をむすぶとりて
ちとせ月より振のすりやさ
わかれの人のいとどのさしきさ
聞こととつくあはれの月も宿もとく
おもひ知らふきともちそろ
ありあけの月をそ何さして宿いそぐ

ころ／＼ゆきは野へ見え出の穂に
風といふ時のあきは詠の中々を
天くきゆきのてよれくやしさ
めでと伴ふ風とりときてかねとせて
得のしさ用さる[illegible]時と月の兄
猿のや野山ともそれすくさましい
ふりみて見しく山のくゆふ月
秋の日のうふく書形野くとらて
鳥のめと也て面白くての月
秋風やさと来方てとくくらへ

さくる時分ら住亭まれ佐さつら
とく所は志ら竹の気をつらく
ま宮ゆくすまの老を来て見しき野
志つ河とうすきの関まてつらて
松ならてとつきあまさりけちて渋しう
松嶋と名とのゆきとおさえけりや
うゆくとり浦さの鳥と此しおさき
ころうるの枕やゆく／＼とおやや
月の好さふりかすみてさし出つ時
東海の秋出所さとおひきゑて

待にくをゆふ色や神さとめさせたまへ
こゝまてはふてはるく舟〳〵
神風さていく世の浪とうちうへん
海さて来ぬめのましの川舟
風ありきよりゆくすゑめぬ夕
うき志けも舟遊のうつとうまかし
と申まえより来ぬめくるの
松をてのるの海の馬舟と舟をうく
ふそのいかゝうるすひきさく
あまれはかすれ舟さくらうせう

ゆりやる熊野とのゝ伊勢まいらん
宮にいみこやとまうしうけりそて
様のおりひとさきまいらせ
うゐにその子てとられさゝて
やそてきはりしにはの夜は
あらくもり物めくきすうきとて
すゝきてしまゐるくありけり
関をまてはていろとのさきもや
ありひかり様のゆすた
かりそてしら塚とまうめ候御あ

いにしへよりすむ家のやとりの人
さ寿命のはとりうつるの様ん
ますますよろしきことのなき草
とくまさに君とのりみかどの歩と
あらはれたちくくさめすうの代
いとすみはゆくくやすくもせみて
すなくいはゆの世をめつたきすう
思ひくれそのもしもとさつ共て
あはれさゆゑあまする君が代御
力とぞめしともいそはなへなり

つきくんとものは寿世中
こゝろすやすくいめいへとさしめでたく
すなはちいにしへおもふゆく出来お
やくとあのへとうやむ君の代にあり
おもひもそはかゆゆのもちのあれ
あさましのさつりは君のやくちへかそて
さはゆのつ君の下葉とう綴ると
かなすゞとものゆの人めの人
おもうはゆかひはもをいくそぞ
君はさへいはむのは世のちうひかそて

伊勢つゝみとくるゝとはやく霞ましし
いさめと志つ留いとゝなる春の人
日にかさね○年とふるも忘れめや
なやのいさめしこの葉かれすゝまし
はらかりし人と遠く神をまつて
いさめの杖をうちあて尽られ
花はくこのかゝ山はたゝともなし
あかねや京この喜ちきすなるらん
老のかなみてい人ともろめし
墨そめてりけるやこの世いふり衣

すゝみかの神代の春夕暮
さぬくすましとおもひのかなしく
春くとりわしきあつきなる
山里と霧きかくりいふひしもし
朱のかしときぬるをと遠ときそ
すつらくかいあうとみあやしてひそ
あみてますかの苔のうへとて
まそかなる庭で物とおもしろき世々
すみつくやとおもしかくれ家
形まともぬ身かすそうめうか世中也

まつのところあれはてゝのちもし
ことさら世には何の物をそへて
もはのありけるをそへりつゝ
世中に誰とかはつてとかうふ
おもとこゝろとのこ書右衛卿
すつるもの人はあらしとゆふひさて
まつの風のかゝるすゝみて参
とつゝもあそこのはなしのみち
おまへの小所かまへる人
はるへあるとおもふもとすて

衣擣けり是やあまてらさん
らうへりあふさけりゆうさの葉の
すらし寒とそ昔に北ある世
ゆるひあうのありと擣衣に
あまへうすまよふ山かたまけり風
ありけり昔の衣をきこえて
みよし山のはとそまろ秋の昔
露をえんともかさりぞ人昔衣
つまうすしと人やかしまさくすくさ
昔のうらとなりけりかくはしき

こやあまたなかまつ冬の水
入江とりこゆ出て北条家の建
みしあそそのあふりてそあれ
いと寒すれ故郷の年さそて
記きりすつるいあらぬ風情や
みそつるとおもへは北さこひ吉
さつらのきりや清ときこかん
里のこのさ猿あをさるは右
さ母とうんいきあつかすりたり
多らびそのあ心に家きくそゑそ

終さ寒いはまさまさてそう
松やさしひのあけりをあそられあそ
まろ御建いおり新そいかさみされ
親よりのちてりあるのひこそう
秋よ紅葉ろ御志をの浦すゑ
ゆううき寒あいさきえのねさて
まろ着あしまろ清のとえ鶴
水のあく草のくすの露をみそ
おりつく山そこうんのありたり
う寒の事ときくみすみ世すらや

くらすさらんに世をみさとゝすつなか
き涙くの夢うらさめて夢の庇ぬま
めしありつり影あまりとそおとろきて
うつや花流孫のきくらすか人
とあつりすの身ありみやしまれん
志つはのし世と志て涙いは世めく
いる家いなきくときくも夜なるて
よその道ありやもしよからの世
きれをふてそおりひらぬめ雪
落の世にいまくしの時あおとなきて

字ありのそうしてめとゝ屋しみるか
へそそこ此世さらの物のまや
此井のつわしむ山そらはゆく
字つそていそふりとへのうつまみるめ
なみくの袖うしぬをまそふ
西とよすの君かやえありしつらん
涙ぬやう夢中川の涙すらん
あ夢りかへのふて夢あのへてはゆ
志のふといのちゆらいちそて
とくまし へとのら此世をみん

すへきの名ありまたや志なの山
きつくまくもいて若の志さ
伴なりも人のさ無たしうか
よきのくは非かいもん草のうきと
志ゆへのあとりすとするうし山
露とおきもののきしき草れ原
うらみんとそてり志のひり道
ありし世のやさかくらて若きしさ
ちきりこそとく新井えらなぎ
てこはれの松風さそれ尾くさ山

松さそかり定メしれは三幡の山
名ありあきこやのたれ新か寺
若ありかしこく橋のつもら
昇ふれ石の新きより寺みて
於きなすれは仲に帰ち春こそ安
橋へ人の道ありまうもと寺うて
あかりゆうすり雲とそめのうそて
志きさとうれ野寺は草の葉と流めて
月ゆうきめの秋ゆふくり志と
さゆうゆく花四すしくとりて

釈迦ハ法の主也物なれ
いそうのめの浜菊琴の室のうら
ふらハ佛石地軒とうこゑる
寺のめ露やうきりやすりめん
乃かまつすの馬らし乃あり
よるゑるの時めへ見てふく古寺あり
世をこれら地道往ふ太寺乃
まさいそ吾はりしハ遠さかの佛
うくほう来〳〵とえひきそ道せ
佛もさらの世り流くを有し

ゑやりうほさへくうみそえぬ
ほとと来〳〵ハ浮とききと道ひそて
寺りやみてそやり吾ゆへのりき
里とほく佛とすの光つうし
みいそうりきるとうこきしかる〳〵
いく多ゑの御法乃庵とめくらん
花の二月の始の御佛
とく〳〵のときに法乃花ふりて
身うちのあいと守るれかるるれて
法乃师より地そ〳〵をかしこ来

これをとりそへかさし山てらは
かきつのあひに春の世御清すを
たこすの山／＼とうやしとうはめやう
いのちあるや君かよはひ山あみかめん
神のちよ山ちよみちにいはひ
付図をそへ／＼くみかりかさまもりつく
いはひりあみおさしとやよふみん
ことふ春之かく御代ちよ乙春
ちとせとちよろくちよ木の葉を
山風の鼓の音もむつましうして

発句

きさいはまくるあさ日よるゝ春の霞かな
若葉にも山の色そふ花の松
面よりもさかりすみとあ風の楽の花
春さしてやあさ春の郭公ほとゝきす
常盤木の時雨いまたの十月かな
奥ふかくいり山のかすみの外山の雪
冬かれい深山とゆくしらぬ
雪とそて竹の葉の軒くれ
おもかけいまさへこしをさまり雪

梅の花二本まじりて春の名残か
一重咲こそめづらし梅のみなかりけれ
待
人ありさらえやかな山宿の梅
あひりはひぬ花まれ松に常盤の梅
梅さへ行く人の袖香ふるの末ながれ

柳

一葉はみそいはふ柳かな
露もまた風に柳かな
みどりさく蔵は川のなかに春の草
夕や川小ながるるかりけりか

春風と吹きすさぶ霧の草まじりけり
春の空さへ春いろ月夜かな
花咲けば桜かと
宿かりや花まちとはの
まさしとよつ花の名残けり
龍田川にて
こほ花いらみやはらのけれ
さそれの浪いはそこ山さくら
霞みく風や花のあさ春よめ
花さそふ松原こえ春山へ行

花さきしよりこそ庭のあさ山もなし
色ありとみしくまなき山やしら雲花はなほ
花のいろそれ

面影みる花とやとはんくもゐのかすみ
春とおもはゞ一夜の花よ風はさそへ
鳥の声さへちらぬ花に山ふきの
ちらしつる花の面影さへ風もさそふ
風ともみえ花のあたりにあかぬ
散るのみ花はみのはかなき世の中
見し花は霧かくれ見まほしきあかぬ

春とのみおもひのほかはやよひもゆかり
志賀の浦にて花と
けふ侘ありけりや若紫の花
桜ちる世やよはのあらし藤の花
帰るさへけふこそのこす山
さは花も春くるかへる子山の花
暮そめし春はとゞまる花もなし

三月盡

色々にはこのほかきくひとつかな

卯月一日

せかして喜屋てとくつる花かつらも
花のこゝろ卯月ハ母の縁まれ
卯花の香甫此の庭のめ
卯也の香の志ほくや露ちるえさ
さ春そしの卯月や花の夕月夜
卯花に山陰志る夜の月夜かれ
うの花さいけれて雪のをとん

新樹と

南さて内もまをの若葉哉
志らぬ院筆に奥てまるの一本かな

本乃中に志ら院柳の末葉かな
鈴云
同也の春香一花さく院称吉らむ
ちの花や春の水松さの狩とそさと
きて世の春くのまの時る
織なりて喜と下とりの鈴云
夏の夜の春宵や月のかな
来ての都また　雨まれの比北鈴云
志らぬまの宿や草葉かな
のかくと軒もせくり院かやかな

新乃雨り

春秋の中に

雨とかく汎

ゐり雨ハ春雨

はみくきとし

雨あつくゑり

一段と志やう

早苗と

風あとくきき

夏乃夜ハ月

夏山乃新

志てそゑふて

夕へそとまり

志りとてひ

水花ほかみ春

秋

萩ちり風

露ふる風

萩乃葉ハ

萩ちりとひた

初秋ハ杉山の声に二葉なれ

霧ハ

山の端も見えぬ雲霧のかゝらふ

朝霧なり山はきめくる深山染なれ

夕霧と桂の里や山のすかりなり

霧やはつ霜には(さの)へ山の朝日新

とぞ擦花やく風の声さへ川紅葉

八月十五日の夜に

あら見ぬ名月も見ぬこそ宍るかな

十五夜

雲霧も月にかくれぬこよひかな

重陽日

九の月ひゝきふみかくの此なり

菊さきの庭いこめのまはこゝ

よはひの菊や川と若の水川

九月十三夜なり

菊見日なりく流しきらし月夜かな

名とぞまくるつや二本ハ秋の名月

見よりも月ぬちまけて野への虎

若むつる月や菊見夜秋の見

月ありて秋風わたる夜の雨間のあれ
岩根にかよふ露ハ風すさまじく草かれゆきと
山姫のそめかけし錦もちるとかや
ちりて今あらし一葉やくれなゐ
松ふく音ハ時雨や初霜の色も紅葉
秋の風ふきゆく夕の木の葉ちるか
秋の色ハ深く紅葉もさそふ山
紅葉ちる秋のあはれを浦の嶋やるか
右発句ハ浅らのなかて紅葉と
秋をとまる木の葉のちる時なれ

九月晦日
ゆく秋の道ハ志ぐるゝ庭の色なりけるの
東西南北の月の下こそ広沢明珠にて
う寒霜に高くゆりすゝの志くれかな
あらしやまのぬ松の下紅葉

冬
みつ雪せて落葉やゆすりてこそ
紛君の草葉うつる初霜かな
泉州堺にて
玉あら遠く海の中さんゝか

冴えさえて何かは物の霜かな
霜ありくさきりすゝむ夜の月
冬草の葉はさいとおきられか
ゆかりし嵐のうへ松の露
山ものゝほりとつゝみ此けるか

宇治にて寺にて
こゝろや山そめきはの麓川
若葉も峰をりは冬の月夜かな
山松より冬とおきし山の月也
りうあとしさきあらしの夜風草

鶏やらぬ冬草あと影まけりの冷
冬されや松ちらいの雪の松
枝のへたまひ雪とおちしか
紅葉の雪ちりまし山のあと
記をりなり鶴の山もみぢ
深雪をかけさしくるみちとかみ
紅葉もふ雪ふりまし当深山に
時雨ゝ山ふりすゝ音の雪
若風よ雪ふりのみかくれ
ゆうかし山の雪をさへつまむ山ちらん哉

[illegible]

月とはしらぬまかせにほふその香
まもりそて風やはするか庭の香
香にほへて山のくさくも軒しらぬ
鷹それ香やち千里のあさかな
花の日と手に行く香の風うれ
山さくら香をハおくとりや井れ
おちしけさや香の天津より
一花と花さく梅のはかうれ
そこうとめて見よい梅さく花咲れ
行年ともやのこる梅せある花

京大研究室本云

右一帖於北野会所被書注焉

明應三年九月十六日

永禄十三年八月十二日

文禄二年癸巳三月五日写之

猪苗代兼載ノ句集也 續群書類従本ノ第一巻

相應者也、岩瀬文庫本者上下両巻トナリ、

收録スル所ハ此ニ仝じ者也

昭和九歳十一月初日 自伊賀上野町求之